小学生に貸した傘

吉田恭子

秋雨が急に激しく降りだして、しばらくすると家の入口の軒先に、人影と小さな声がしました。そっと出てみると、小学生の女の子二人が雨宿り。

「ずいぶんぬれたわね、家まで遠いの」

「わたしは傘があるの。でも、Sちゃんがないから…」

ひとりは、ランドセルから折りたたみ傘を出しました。すぐ近くのG小学校の子どもで名札を見ると四年生です。きけば家は五百メートル余り先の新しい団地です。

タオルをもってきて濡れた衣服を拭いてやり、「風邪をひかないように早く家に帰ったら」と古い傘を貸して、おやつにと包装された小さなクラッカーをあげました。その子たちは、にっこりして帰っていきました。それから一カ月以上たつのに、まだ傘は戻ってきません。

「返すのは急がなくともいいわ」とは言ったけど、あげるとはいわなかったのに。

彼女らの団地からわずか三百メートルほど南にいくと、隣町の集落があります。そのはずれの農家の五年生のE君は、私たちにあうと「オハヨーゴザイマス」や「コンニチワ」とはっきりした声であいさつします。

私たち夫婦が、ウォーキングを始めた三年前の初対面から変わりません。当時は姉さんと一緒でした。中学生になり自転車通学に変わった姉さんも同じです。どうやらA小学校の指導によるようです。つい先日も別の集落で登校する列にあうと、一斉に「オハヨーゴザイマス」と、私たちにあいさつしました。

家の前を通る小・中学生は出あっても路傍の電柱と同じように無視してくれます。おそらく彼らの学校だって、通学途中にあう人を

無視しなさい等とは言わないし、生徒同士もあいさつを交わすようにと指導しているのでしょう。でも、友達以外には声をかけないようです。

これは本誌五四号で三輪先生（千葉大）が紹介なさった、ヒューマン・スケール（人間的規模）の問題なのかなと思います。ちなみにA小学校は全校児童約一二〇名、一クラス平均二〇人、他方、G小学校は児童数約五五〇名の、いわゆる市内中心校。児童の家庭は街か団地にあります。軒を接したり、家は新しくても庭が十五平方メートルもないのが多い住宅地です。

E君の集落は、裏庭に出れば豊栄市や新潟市を越えて、ときには佐渡の山並みが見える広々した自然のなかに位置しています。そんな村なかを歩いている途中で、人にあうと黙って通り過ぎるのが私には不自然に感じられるのです。

先日、県北の山北町・勝木に住む高校以来の友人Hさん宅を訪れました。お孫さんが三人で二人が小学生です。一年生は十九人だといいます。「少人数クラスでいいでしょう」というと、家に帰って後、同級生と遊ぶのに「車で送り迎えするのですよ」とその子の祖父の説明。仲良しが五キロメートルも離れたところにいるのだそうです。ここでは子育ては家族のみんながしている、と思いました。

ふと、小四年の傘をまだ返さない子どもを思い出しました。「あの子は家では学校の帰途にあった出来事など話さないのかしら」、「でも家の人も見慣れない傘を見れば、話題にするでしょうに」と割り切れないものを感じます。家を探して親に言うとか、G小学校へ伝えて指導してもらう、とも考えましたがよい結果が想像できません。古い傘にこだわるなどは、物あまりのなかに育つ子どもには理解できないのかも知れません。

でも、傘が戻るのを待ってみたいと思います。

（よしだ　きょうこ・新発田市・主婦）